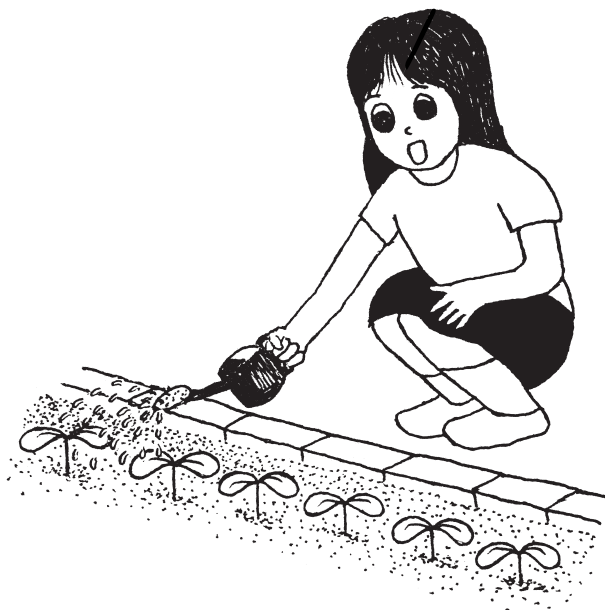


I 小学校低学年

いのちに ふれよう

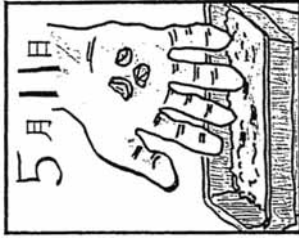
よく みよう。 みみを すまそう。
ちいさな ちいさな いのちに。
ちかくに よって みつめよう。
とおくに はなれて かんじよう。
おおきな おおきな いのちを。

(出典：文部科学省「こころのノート」 小学校1・2年 p.51)



1 あさがおの かんせつ

のはら みどり



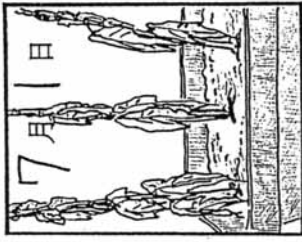
あさがおの たねを
三つ まきました。



あさがおの めが 出ました。
はつばが 二つ ついて いました。
どんどん 大きくなあれ。



はつばが たくさん 出てきました。
つるが ぐんぐん のびて きたので
ぼうを 立てました。



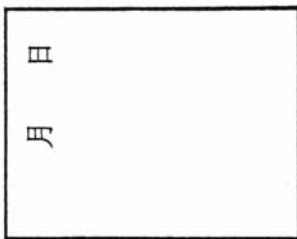
水やりを わすれたので
はつばが しおれて いました。
いそいで 水を あげました。
しんばいで たまりません。



花が たくさん さきました。
赤 びんく むらさき
とても きれいです。
たねも できて いました。



たねを とりました。
百こも とれたので びつくり しました。
たねつて ふしぎだな。
らいねんも まきたいな。



1 資料名 「あさがおの かんさつ」

2 資料について

この時期の児童は、動物や植物と触れ合うことに対して強い興味・関心を示す傾向にある。児童は動物や植物との日々のかかわり合いの中で、親しみや期待の目で見つめたり、様々な願いをもったりしながら、その成長や変化の様子を直接体験することで学んでいる。その過程で、児童は小さな動物や植物の中にも命が存在することに気づき、さらに、その命の素晴らしさに心を寄せ、慈しむ心をはぐくむことにより、自分の命のかけがえのなさを自覚していくようになると考える。また、飼育や栽培を通して、生きていることの尊さや素晴らしさ、枯れたり死んだりしたときの悲しさや恐ろしさを体験することは児童の成長にとっては大切なことである。

本資料は、児童のアサガオの観察記録である。アサガオは、栽培が比較的容易であり、一人一鉢で世話ができるため、ほとんどの学校の生活科で取り組まれている。土作りから種まき、発芽、開花、種とり、水かけや支柱立て、様々な色の花、観察記録など、変化と継続性が楽しめるため、児童は毎日親しみと期待をもってお世話を続けていくことになる。その中でも、「発芽」「開花」「種とり」は大きな楽しみであり、その時の児童の喜びや感動も大きい。児童はこれまで5か月間にわたるアサガオの栽培と観察を体験しているため、アサガオに愛着をもって大切に育てている主人公の様子に共感するところが多いと思われる。

指導にあたっては、前半部分では、資料のアサガオの観察記録に自分の体験を重ね合わせて、主人公の心情に寄り添い共感的に考えさせるようにすることが大切である。後半部分の、アサガオの成長と死に人の一生を関係づけて「人の命の連続性や有限性」に気づかせる場面では、学級の児童の実態に応じて無理のない内容にする。特に、人の命の有限性では、「動物や植物と同じように人もいつかは死を迎える」という程度にとどめ、自分が死ぬということは取り上げないようにする。終末には、命を大切にする心情を深める意味でも、とれた種を大切に保管することや全員分の枯れた茎や葉を集めて畑に埋める活動を行いたい。

3 留意点

生活科におけるアサガオなどの栽培活動と種とりの活動が終わった後に本時を実施することで効果が高められる。また、秋まきのものは2学年にまたがるので栽培の継続や資料の保管等に配慮する必要がある。

4 事前指導の工夫

資料「あさがおの かんさつ」は一般的な内容であるので、自学級の児童の観察日記や教師による記録を多く残しておき、楽しかったことや失敗談、苦労話など、様々なエピソードを充実させておくことより効果的である。また、「こころのノート」P.52の「生きものを そだてよう」を活用し、花の栽培の記録を残しておくようにする。

5 ねらい

アサガオを大切に育てている主人公の様子に自分の体験を重ね合わせて共感的に考えることを通して、アサガオにも命があることやその命がつながっていることに気づき、命を大切にしようとする心情を深める。

6 展開例（2時間扱いも考えられる）

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>導 入</p>	<p>1 アサガオの枯れた茎や葉をどうするかを話し合う。</p> <p>種をとった後に残った茎や葉はどうしましょうか。</p>	<p>1 アサガオの枯れた茎や葉を提示して、その取り扱いを問うと、児童はいろいろな考えを述べてくると思われる。どうするかを決めるために、「5か月間心を寄せながらお世話してきた体験をもう一度ふり返ってみよう」と投げかけることで資料に向かわせるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・種以外はいらぬから捨てる ・カラカラに枯れてゴミになった ・役目が終わって死んだのかな ・アサガオから花や種をたくさんもらったよ、ゴミなんかじゃないよ
<p>展 開</p>	<p>2 資料「あさがおの かんさつ」を読んで考える。</p> <p>アサガオの種をまいたとき、みどりさんはどんなことを思ったでしょうか。</p> <p>しおれたアサガオを見たときみどりさんはどんな気持ちだったでしょうか。</p> <p>たくさんの種がとれたけど、この後、この種はどうすればよいでしょうか。</p>	<p>2 資料と併せて、自学級の観察日記を基に、発芽、開花、満開、種とりなどの写真やイラストを掲示して児童の理解を助けるようにする。資料中の空白の絵と文については簡単な予想にとどめておく。</p> <p>種をまいたときの期待感を自分の体験と重ねて考えさせるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しみだな、早く芽が出ないかな ・たくさん花が咲くといいな ・がんばってお世話をするからね <p>まず、水やりをうっかり忘れたみどりさんの立場に共感させたい。次に、同じような経験のある児童から、心配でたまらない、なんとか枯れないで元気になってほしいと願うみどりさんの気持ちを引き出していく。こうして、アサガオにも人と同じような命があり、命のあるものを大切にしようとする気持ちを主人公に託して考えさせるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水やりを忘れてごめんなさい ・枯れたらどうしよう、かわいそう ・アサガオさん、がんばって ・なんとか元気を取り戻して <p>「アサガオの命の連続性」に気づかせたい場面である。「たねってふしぎだな」と、児童から出るであろう「来年」とい</p>

<p>展</p> <p>開</p>	<p>3 アサガオと人で似ているところを考える。</p> <p>アサガオはたくさんの花を咲かせて、たくさんの種を残したね。アサガオと人で似ているところはどこでしょうか。</p>	<p>う言葉をキーワードにして、茎や葉は枯れてもアサガオの命は種を通して次の年につながっていくことを捉えさせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大切に残しておいて、来年の春にまたまきたいな ・来年も花を咲かせたいな ・来年の1年生にもあげたいな ・種は生きている、種には命がつまっているんだ ・種から種へ命はつながっていく <p>3 アサガオの成長と死に人の一生を関係づけて「人の命の有限性や連続性」に気づかせたい場面である。ここでは、「人もいつかは死を迎える」、「けれど人の命もつながっている」、「だから命を大切にしよう」などのことを、児童の実態に応じて、少しずつ深めていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生まれてから大きくなって枯れてしまうところが似ている ・アサガオは種を残したよ、人だって子どもを残すよ ・アサガオと同じように動物も人もいつかは死ぬんだね ・人の命もつながっていくんだ、命を大切にしないでいいね
<p>終</p> <p>末</p>	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	<p>4 「こころのノート」P.64、65の「生きているね。つながっているね。かがやいているね。」を活用しながら、命がつながっていることを中心に話す。</p> <p>また、この後、種を大切に保管することや全員分の枯れた茎や葉を畑に埋めることを知らせ、資料の空白部分の絵や文を完成させていく。</p>

7 評価

- ・主人公の観察記録に自分の体験を重ね合わせて考えることを通して、アサガオにも命があることやその命がつながっていることに気づくことができたか。
- ・命の存在や命のつながりについて考えることを通して、命を大切にしていこうとする心情を深めることができたか。

8 事後指導の工夫

学級で草花を栽培したり小動物を飼育したりしている場合は、係活動や当番活動を通して実践的指導を継続していく。

2 いただきます

ぼくは、きゅう食が 大好きです。とくに、チャンポンが 大好きです。

でも、にがてな ものも あります。それは、魚と ニンジンです。

学校で きゅう食しゅう会が ありました。校長先生が、

「きゅう食は、えいようの バランスを 考えて 作って あります。だから、できるだけ のこさないように 食べましょう。もう一つ 大切なことが あります。私たちは いろいろな 生きものの いのちを いただいて 生きています。ありがたいの 気持ちを こめて 『いただきます』と あいさつを しましょう。」と、話を されました。

ぼくたちは、教室に もどって、もういちど 『いただきます』に ついて 話し合いました。先生が、

「今日の きゅう食は、チャンポンでしたね。どんな 生きものが 入って いましたか。」と、たずねられました。みんなは、くちぐちに、「ふた肉。」

「イカ。」

「かまぼこ？」

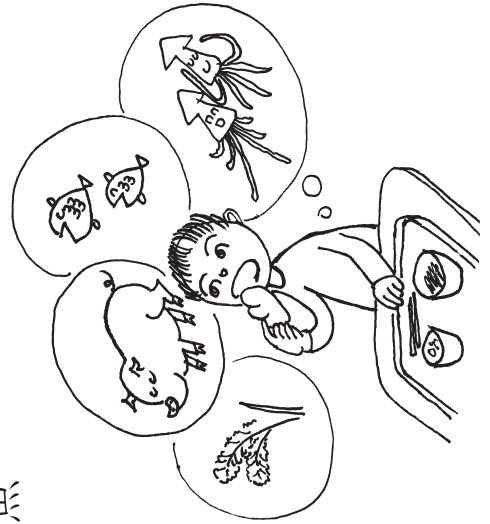
などと、こたえました。

「それだけですか。ほかにも、
まだたくさんありますよ。」

「えっ、まだあるんですか。」

「かまぼこも、もともとは 魚

ですね。それに、チャンポンのめんは、小麦
こからできていますよ。キャベツも、はた
けで生きていました。モヤシも、生きて
いましたよ。…」



そこまで聞いて、ぼくははつと気がつきま
した。

(そうか、どうぶつだけじゃなくて、野さい
もくだものも、ぼくたちが食べるもの
は、もともとはみんな生きていたんだ。)

お友だちが、

「今日のチャンポンは、ぜんぶ生きものから
できています。」

と、言いました。ぼくも、

「だから、『いただきます』と、あいさつする
んですね。」

と、言いました。そして、ぼくは、

(魚や ニンジンも、これからは がんばって
食べよう。)

と、思いました。

1 資料名 「いただきます」

2 資料について

この時期の児童は、ニンジンやピーマンなどの野菜嫌いをはじめ、魚や肉が苦手などの偏食傾向が多く見られる。また、豊富な食物に囲まれているため、嫌いな物があると簡単に食べ物を残すことが多く、自分の健康のために嫌いなものもがんばって食べようとする意識も低いようである。人は食べていかなければ生きていくことはできないが、人の命を支えているのは、食べ物となった別の命であり、その命をいただいているということに気づいている児童は少ないと思われる。そのため、毎日の食事での「いただきます」「ごちそうさま」も形だけのあいさつになっている。

本資料は、小学校でよく行われている給食集会と、その後の学級での給食をもとにした話し合いの様子である。長崎の名物であるチャンポンの食材に目を向け、それぞれの食材の命をいただくことによって、私たちは生かされていることに気づき、いただく命を生かすためにも、自分の命を大切にす児童を育てていこうとするものである。ほとんどの児童には多少の好き嫌いはあると考えられるので、魚とニンジンが苦手な「ぼく」が、学級での話し合いの中で、食べる物すべてに命があることに気づいたり、「いただきます」の意味が分かったりする過程は、児童に共感的に受け入れられるものと思われる。

指導にあたっては、まず、「泳ぐ魚 かまぼこ」など、つながりが分かるように写真や絵を提示したり、チャンポンの食材の一つ一つを具体的に取り上げたりすることで、生きているものを食べ物としていることに気づかせていく。次に、「いただきます」の意味を考えたり、これまでの自分をふり返ったりすることで、食べ物に対する感謝の気持ちを高めていくようにする。このようにして、動物にも植物にも人と同じ命があり、その命をいただくからこそ、今生きているこの命を大切にしようとする心情を高めていきたい。

3 留意点

生活科の野菜を育てる学習と本授業とを関連させて行うことにより、他の命を「いただいている」ということが実感できやすい。

なお、牛や豚などの動物の命を奪い、食料としていることについては児童のとらえ方の差が大きいと思われるので、取り上げ方に十分配慮する。

また、個人の偏食や嗜好の問題については深入りしないようにする。

4 事前指導の工夫

チャンポンの食材に好き嫌いがあるか、嫌いなものはどうしているか、「いただきます」や「ごちそうさま」のあいさつをしているかなどのアンケート調査をあらかじめ行い実態を把握しておく。また、終末で使う給食時間の様子を撮影しておく。

5 ねらい

チャンポンの食材一つ一つに命があることを知ることで、私たちは食べ物の命をいただき、命をつないでいるということに気づき、今生きている命を大切にしようとする心情を高める。

6 展開例

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 生き物の命について話し合う。 どんな生き物を知っていますか。	1 学級や学校で飼育している小動物を話題にしなが、他に知っている生き物を問うと、昆虫や動物を挙げてくると思われる。 そこで、学級で栽培している花や野菜は生き物かどうかを問うと、花や野菜も生き物であり、生き物すべてに命があるということを想起してくるであろう。 ・セミ、ザリガニ、金魚、うさぎ ・花や野菜も生き物だよ ・どんな生き物にも命があるんだよ
展 開	2 資料「いただきます」を読んで考える。 チャンポンには、どんな生き物が入っていましたか。 ぼくは、どんなことにはっと気がついたのでしょうか。	2 チャンポンの写真を提示して、チャンポンの材料にはどんな生き物が使われているか予想させる。その後、資料を配付してどんな生き物が入っているか考えながら読むように助言する。 「泳ぐ魚 かまぼこ」など、つながりが分かるように写真を提示し、食べるものには、もともと命があったことに気づかせる。 ・ぶた肉、イカ、かまぼこ、めん、キャベツ、もやし・・・ ・チャンポンは全部生き物からできているんだ 動物や植物の命をいただいて私たちの命が生かされていることをとらえさせる。 ・命は動物だけにあるのではないよ ・食べ物はみんな生き物なんだ ・校長先生のお話のように、私たちはいろいろな生き物の命をいただいて生きているんだね

展	<p>ぼくは、どんな気持ちで「いただきます」とあいさつをしようと思っているでしょう。</p>	<p>食べ物の命を生かすためにもがんばって食べる、感謝の気持ちをこめて「いただきます」を言う、がんばって生きるなどの思いを込めたあいさつをしようとする心情をとらえさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 私たちのために命をくれた食べ物を粗末にしたらいけないな ・ 食べ物からいただいた命を大切にしよう ・ 私たちの命を守ってくれてありがとう
開	<p>3 アンケート調査の結果を見て自分たちの生活を振り返る。</p> <p>みなさんの好き嫌いの様子や「いただきます」のあいさつの仕方を見て、どんなことを思いますか。</p>	<p>3 好き嫌いや食べ残しの様子、「いただきます」のあいさつの仕方などを振り返らせ、ねらいとする価値へ気持ちを高めていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 嫌いだからといって食べ残して捨てていたから、食べ物に悪かった ・ せっかく命をいただいたのだからがんばって食べないといけないな ・ たくさんの命をいただいているのだから、「いただきます」と心を込めて言おう。そして自分の命も大切にしよう
終末	<p>4 給食時間のビデオを見る。</p>	<p>4 自分たちが給食を食べる様子を見て、これからの食事の仕方や自分の生き方に思いをふくらませる。</p> <p>また、「ごちそうさまでした」の意味やあいさつの仕方について教師が説話をするこも考えられる。</p>

7 評価

- ・ 食べ物の一つ一つに命があることを知ることで、食べ物の命をいただいて私たちが命をつなぎ生きていることに気づくことができたか。
- ・ 命をいただくことについて考えることを通して、今生きている命を大切にしようとする心情を高めることができたか。

8 事後指導の工夫

給食指導や日々の生活の中で、意識の継続を図り、生きているものすべての命を尊重し、命を大切にする行為や振る舞いができるようにする。

9 参考

本資料は、県内の学校で行われた給食集会の話をもとに作成した。